

メンデル

日本メンデル協会通信

No. 33 — Nov. 2018

発行所 (公財) 日本メンデル協会 本 部 東京都文京区本郷 2-27-2 エスベランサ V 内
電 話 03-3814-5675 Fax 03-3814-5352

発行日 2018 年 12 月 14 日 発行人 河 野 重 行

日本メンデル協会とキトロギア

— Sheikh Shamimul Alam 教授のこと —

河 野 重 行

(公財) 日本メンデル協会会長

日本メンデル協会がキトロギア (CYTOLOGIA) の運営母体であった国際細胞学会を合併したのは 1990 年のことで、それ以来キトロギアの刊行は本協会の一つの大きな事業となっています。2013 年に長田敏行前会長のご尽力で、日本メンデル協会を公益財団法人化した際にも、定款 4 条の「事業」の 4 項には「細胞遺伝学・細胞生物学国際学術誌キトロギア (CYTOLOGIA) の刊行」とあります。第 4 項ですから、キトロギアの刊行だけが日本メンデル協会の事業ではないのですが、雑誌の刊行は生半可ではない大変な作業の連続で、多くの労力や資金がそこに注がれております。その甲斐もあって、キトロギアは、インパクトファクター (IF) を復活できましたし、大扉の採用や A4 判化、Web 投稿も実現しました。ただ、出版業界が寡占化する一方で、インターネットを利用したペーパーレス化による専門誌の乱立にハゲタカジャーナルの横行なども加わって、専門誌の運営はかつてないほど困難な時代に突入しようとしております。

欧米を指向する他の国際専門誌と異なり、キトロギアにはアジア、アフリカ、中南米からの投稿が多く 2010 年からの論文掲載数をみてもインド、日本、タイ、トルコ、バングラデシュの順となっています。ただ、投稿された原稿の審査などを担当する編集顧問委員会 (Editorial Advisory Board) の国外委員は、キトロギアの場合、伝統的に欧米中心だったので、2018 年からインドのパンジャビ大学の Vijar Kumar Singhal 教授と Raghbir Chand Gupta 教授に加

わっていただいております。この時の編集顧問への就任依頼は、キトロギア編集委員会の決定を受け、2017 年の早い時期にバングラデシュのダッカ大学の Sheikh Shamimul Alam 教授にも打診しておりました。本人は快諾してくださったのですが、2017 年 12 月 18 日に心臓病で急逝してしまいました。ネットニュース (UNB) は、その日の朝、シンガポールの病院で亡くなり、57 歳だと伝えておりました。結局、Sheikh Shamimul Alam 教授のお名前が、キトロギアの表紙裏にある編集顧問の名簿に載ることは一度もありませんでした。

Sheikh Shamimul Alam 教授は 1991 年 10 月に文部省の国費留学生として来日し、1992 年から 1995 年広島大学大学院理学研究科博士課程に在籍し学位を取得して大の親日家でもありました。その後ドイツでフンボルト財団研究員としてポスドクを経験し、最近の染色体研究には必須の FISH (Fluorescent *in situ* Hybridization) 技術や設備を手にして、その頃からキトロギアへの投稿を開始して、キトロギアだけでも生涯で 50 編余りの論文を発表しています¹⁾。ダッカ大学では、遺族の希望もあって、植物学部の最も優れた卒業生には Sheikh Shamimul Alam 教授の名を冠した金メダル贈呈するとともに、功績のあった学生には奨学金を授与することに決めたようです。

早春のバングラデシュとインドを旅してきたのは 2015 年のことです。私と当時会長だった長田先生はキトロギアの国際発信力強化の一環として「和田賞」の授与と講演に向きました。Sheikh Shamimul Alam 教授が第一回和田賞の受賞者だったので。今もその頃も、インドは兎も角、バングラデシュのことはあまり知られておらず、私のガイドブックには「混沌の国を巡る—旅人に会わない旅」とあったくらいです。

2015年は年明けから野党によるホルタル（ゼネスト）がずっと続き、1971年の独立の際の対立もいまだに深刻で、交通機関への放火があちこちで起きていて、国内旅行はおろかダッカ市内の移動すら難しい状況で、「黄金のベンガル」を満喫する春の遠出は望むべくもありませんでした。

ダッカ大学は、春まだ浅く緑が濃くなり切っていませんでしたが、ベンガル独特の鮮やかな色彩感覚のサロワ・カミューズやサリーをまとった女子学生でキャンパスが華やいでいました。当時のダッカ大学の年報には学生数 37,064 名とあって、そこには男女比の記載はありませんでしたが、東大の女子学生の割合 (17.4%) よりも多いように思えました。Sheikh Shamimul Alam 教授の研究室も半分以上が女性のようなのでしたし、お祝いに駆けつけた彼のかつてのメンターも女性でした。90%がムスリムという国なのに、この女性の社会進出ぶりには驚かされましたが、2006年にノーベル平和賞を受賞したマイクロクレジットのグラミン銀行も、その活動を支えたのはバングラデシュの女性達だったことを考えると納得がいきます。

Sheikh Shamimul Alam 教授と彼の研究室の皆さんと植物学部の玄関で撮った記念写真を見ると、湿潤な空気がまわりついたような懐かしさとともに、知日派の気鋭の染色体学者を失った喪失感を強くします。ダッカ大学もでしょうが、Sheikh Shamimul Alam 教授を失った痛手はキトログニアにとっても大きいものです。教授の名を冠した金メダル奨学金を手にした後進の今後の活躍に期待しています。



図1
Sheikh Shamimul Alam 教授 (最後列左) の
研究室メンバー

文献

1. Kawano, S.: Karyotype and chromosome behavior analyses in three regions of the Indomalayan realm. *Cytologia* 83, 223–228 (2018)

国際メンデルデーに参加して

長 田 敏 行
(公財) 日本メンデル協会理事

2018年3月8日には、チェコ共和国ブルノで「国際メンデルデー」の集まりがあり、私は (公財) 日本メンデル協会を代表してそこに出席した。2015年にはメンデル (Gregor Johann Mendel) がエンドウの交配実験を行って、そこで見られた法則性を発表してから150年目にあたるので、この日を記念の日として祝おうといわれて以来の日である。更に、2016年からはこの日を「国際メンデルデー」としようという提案があり、当協会も賛同し、世界的な行事に広がりつつある。私共は、会への参加の誘いは初回より受けていたが、先約があったこともあり、これまでは参加できなかったが、今回初めて参加できたということである。なぜ、3月8日であるかということ、それはメンデルが遺伝法則に関して講演した日であるからである。しかし、メンデルが8年にわたるエンドウの交配実験の結果の法則性について報告したのは、1865年の2月8日と3月8日のブルノの科学協会の2回にわたる例会であるので、2月8日を記念の日にしてもおかしくはない。しかし、主催者であるメンデル博物館館長エヴァ・マタロヴァ (Eva Matalova) 教授の説明では、3月8日に法則性について述べられているので、こちらをメンデルデーとしたということであった。ここでは、「国際メンデルデー」参加報告とともに、ブルノで見聞した新たな動向をお知らせする。

メンデル博物館

当協会の関係者でブルノのメンデル博物館を訪問している方が少なからずいることは、過去のメンデル通信を見ればわかるが、その場所は市の郊外にあるセント・トーマス修道院の一角であった。私の過去3回のメンデル博物館訪問もそこで

あり、市の中心からトラムに乗って出かけた。ところが、4回目の今回ブルノを訪問すると、博物館は移転しており、その場所は旧市内のモラビア博物館の隣の旧司教館（図1）であった。これを読まれた方は、一体なぜと思われるだろうが、私はなぜか抵抗感はなくすぐ受け入れることができた。実は、最初に訪問したのは1999年であったが、そのときはEMBOのアソシエート・メンバーに選出されたからで、会議はプラハであったが、プラハへ行くならブルノまで足を延ばして、送り返したメンデルブドウが根付いているか見てほしいといわれたからであった。その時案内して下さったアンナ・マタロバ (Anna Matalova) 博士（上記エヴァ・マタロバ博士のご母堂）は、案内して下さる道すがら、修道院と博物館には利害の抗争があるとこっそりと漏らされた。その時、一つの体験があり、私はしばしば紹介されているメンデルも利用した図書室を見学したいと希望したが、図書室は修道院に属しており、鍵が見つからないので見せられないとも言われた。修道院と博物館は何か本質的に相容れないものがあるのではと感じていたので、今回の移転はやはりそうであったかという気持ちであった。従って、今後メンデル博物館を訪問希望の方には、訪問の場所に気を付けられるようにと申します。展示品の数は少ないように見えたが、オリジナルのものもあり、むしろ教育的設備に力点があるように見えた。新しい工夫もあり、1階から2階へはエレベーターで移動するが、その間に壁面にCGでタンパク質合成の分子の動きを示している。それと、分子生物学実験の初歩的な施設があるので、分子生物学手法の基礎を習得できる。これらの設備はEU



図1 メンデル博物館

旧司教館で在り、ここでは農業研究会が開かれ、メンデルはその主要メンバーとして参加した。

からのサポートによっているとのことであった。これらの情報は、インターネットのウェブサイト“Mendelianum”で見ることができるので、更なる情報をと思われる方は是非訪問されたい。

国際メンデルデー

3月8日の「国際メンデルデー」は、午前中は地元の教員集団からの出席者へのインタビューで始まり、午後は出席者それぞれの報告であった。チェコ、ドイツ、オーストリア、イギリス、フランス、アメリカ、日本からの出席者があったが、オーストラリアはいわば紙上参加であった。その中で、私の印象に残ったのは2点あり、一つは、ウィーン農科大学のフォルマン (J. Vollmann) 教授が、メンデルがウィーンへ行ったこと、また、外国旅行での滞在先での情報が各地のドイツ語新聞に載っていることを紹介したことである。メンデルについては、日記もなく、科学的な記録類はすべて焼かれていることからするとそれら客観的な情報は貴重である。ただ、内容は一種の備忘録であるので、簡単すぎるのはやむを得ず、過度な期待をしてはならないであろう。しかし、彼がいつどこへ行ったかがわかることは有用な情報といえる。

もう一点は、今年度のメンデル博物館の記念メダルを授与されたドイツ オルデンブルク大学のヴァッカーナーゲル (W. Wakkernagel) 教授の講演で、遺伝学の情報に基づいて書かれた科学フィクションのサベイをしたが、個別の事実を細部に至るまで疎かにしていないメイワー (Simon Maywer) 著の「Mendel's Dwarf (メンデルの小人)」は、大変優れていると述べた。これは、私の著書 (1) でも、全く独立に同様な表現をしていることで、この本は日本ではほとんど話題に上らなかったが、洋の東西を問わず見るべきところは見ている人があるという思いをした。

更に、主催者からは、2022年はメンデル生誕200年になるので、それに備えて準備をしたいがという発言があり、日本メンデル協会も意見を求められた。当協会ではそれに向けて再度「メンデル特別展」をより充実した形で準備していると返答した。この件では、帰国後日本遺伝学会とも連絡を取り合い、何等かの企画を行おうということ

になっている。その時期までにはまだ時間があり、準備はこれからするので、現時点では乞うご期待とだけ申します。ちなみに、メンデルの生誕は、1822年7月22日であるが、文献によっては20日となっているものもある。これは22日の方が正しいという考証があるので、今後の日程の選定には配慮が必要である。

メンデル大学

「国際メンデルデー」の前日、私はメンデル大学で講演を依頼されたので、現在行っている研究から「イチョウの性転換」の話をした。この大学を訪れるのは2回目であるが、前回訪問したときは、メンデル農林大学とっていた。先回の訪問は、1999年で、その時は送り返したメンデルブドウが無事根付いているか確認するための訪問であったが、それは同大学の附属植物園で無事育成していた(2)。その後、メンデル農林大学には、経済学部、園芸学部、その他若干の国際協力施設が増設されて、総合大学としての体裁をとり、名称もメンデル大学(Mendel University in Brno)となった。講演終了後、施設の一部の案内を受けたが、講堂にはほぼ等身長のメンデル像(図2)があり、その前には記念のパネルがあるというようにメンデルはこの大学のシンボルとなっており、国際志向が明瞭に読み取れ、特にアフリカ方面に力を入れているようであった。経済学部は重厚な本館とは異なり、新築と思われるモダンな建物に入っていた。なお、ブルノ市には、マサリク大学があり、こちらでは理学部、文学部、医学部を備え、ブルノ工科大学では工学系



図2 メンデル像

メンデル大学講堂の正面にあり、ここでは学位授与等の大学の公式な行事が行われる。

の学部があるので、メンデル大学と合わせると、これらの大学群でほぼ全ての学問分野をカバーしていることになるが、いずれも創設は第一次大戦後のチェコスロバキア共和国時代である。なお、チェコ共和国には、プラハにカレル大学(プラハ大学)があるが、これは中欧では最も古く、創設は14世紀にさかのぼる。また、ブルノから遠くないオルモーツ大学も長い伝統があり、メンデルはオルモーツ大学の哲学学校で大学の教養課程を修了している。

メンデル旧跡巡り

メンデル博物館がブルノ市の中心部へ移ってきたことにより、博物館を出発点にして、メンデルの旧跡巡りが博物館でも提案されているので、これを紹介する。まず、博物館を出て、次に隣のモラビア博物館を見学し、その隣のディートリッヒシュタイン宮(図3)を見ることができるが、これらはほとんど同一の場所にあり、隣接している。次にヤンスカ通りを下ると旧国立高等実科学校を通るが、ここはメンデルが教員として働いた場所であり、1865年にエンドウの交配の結果について講演をした場所である。更に進むとチェコ人民銀行があるが、ここはかつてメンデルが頭取を勤めたモラビア不動産銀行の後身にあたり、右向きにはそのことを示すパネルがある。ただし、この銀行がこの場所へ移ってきたのはメンデルの没後2年目ということで、元々はモラビア議会の建物の中にあつたということである。その先には、メンデルが物理学他の講義を行った国立高等工業専門学校があるが、これは上記ブルノ工科大学と



図3 ディートリッヒシュタイン宮

モラビア博物館に属し、かつては植物の展示なども行われた。正面左には、ナポレオン戦争後の会議に出席したロシアの将軍クトゥーゾフ(M. Kutuzov)のレリーフがある。

なった。その隣がモラビア議会で、新市庁舎と並んでいる。この付近まで来ると、司教館の裏に位置する聖ペテロ・パウロ教会の尖塔を見ることができ、出発点のメンデル博物館へ戻ってくることになる。この全行程併せても3kmほどであるが、これによりメンデルが活動した主要な場所をめぐることになる。そして、メンデルが修道院長というカトリック教団の高位聖職者でありながら、教育に携わり、地方行政、地域振興にも関わっていたということを現実に体感できる。ブルノへ行かれることがあったら、是非回られることをお勧めする。

ブルノからウィーンへ

私のブルノ訪問は今回で4回目になるが、前3回はプラハ経由であったが、今回はウィーン経由であった。メンデルについて書いて見ると(1)、彼がウィーン大学で2年間勉強したことが、遺伝法則の発見にいかにも大きく貢献しているかが実感できた。そこで、ブルノからウィーンへ向かったメンデルの追跡をして、彼の追体験を試みた。今回の集まりの終了後、ブルノからウィーンへと向ったが、プラハ発、ブルノ、ウィーン経由、グラーツ行きの国際特急列車を利用すると、わずか1時間26分でウィーンへ到着した。列車には、グスタフ・マーラー、ベドルジハ・スメタナ、ヨハン・シュトラウスなどこの地域所縁の音楽家の名前がついている。メンデルが1851年10月25日にウィーン大学での勉強のためにウィーンに向かったときは、夜行列車で6時間もかかったということであるから、列車の速度は時速20km位だったろう。現代の鉄道旅行からメンデルの旅行の様子はたどりがたいが、風景はたどれるだろう。3月初旬だったので、未だ冬枯れの時期であったが、常緑のモミ、トウヒ、マツは分かったが、その他の落葉樹は判別できなかった。樹皮の白からシラカバがかなりあることは推定できた。ただ、やたらヤドリギが多いことが目についた。列車は、パノニア平原を横断することになるが、風力発電塔が目立つことは、この地方はかなり風が強いことが窺える。それにつけても、メンデルは遺伝学の論文はたった2篇であったが、旋風を含む気象学の論文を9篇も書いていることが思い起こされ

た。

ウィーン中央駅(これは、かつては西駅とっていたのが、最近このようになった)に到着して、歩いて植物学教室のある植物園へ向かい、予約しておいたサヴォイホテルへ向かった。そこを基地にして、まず、メンデルが下宿したインヴァリデン通りへ向かったが、もうその当時の建物は無いので、場所のみの確認だった。物理学教室は、現在でもウィーン大学の構内にあるので、今回はメンデルがレーデンバッハ(J. Redtenbacher)教授の化学の講義を受けたテレジアヌム学院へ行くことにした。ハプスブルク帝国の女皇マリア・テレジア創建になる学院の建物(図4)は現在も残っているが、もはや大学施設ではなく、テレジアヌム・ギムナジウムなどの施設が入っている。地下鉄から降りてテレジアヌム学院に向かうと学院の建物の正面で、思いがけずリヒャルト・フォン・クーデンホフ・カレルギ(Richard von Coudenhove-Kalergi)を記念したパネルを目にした。ちょっとだけクーデンホフ・カレルギの紹介をすると、彼はオーストリア・ハンガリー二重帝国の日本への代理公使ハインリッヒの次男で、母親は青山光子である。そして、第一次大戦後汎ヨーロッパ構想を提案し、その体現が第二次世界大戦後のヨーロッパ共同体(EEC)であり、現在のヨーロッパ連合(EU)である。これらの施設は、いずれもメンデルの下宿からは3km以内で、移動手段はなんでもあったかまでは調べていないが、市の中心部にあり、徒歩で達することができる距離である。なお、ウィーン大学植物園へは何度も行っているが、今回その一角にか



図4 テレジアヌム学院

メンデルがウィーンで勉強していたころは、化学教室はこちらにあり、メンデルは化学の講義をこちらで受けた。

つての著名な園長を記念した場所があることに気付いた。それは、エントリッヒャー (Stephan Endlicher) , フェンツル (Eduard Fenzl) , ケルナー (Anton Kerner von Marilaun) であるが、その内フェンツル, ケルナーはメンデルと関りがある。フェンツルは、メンデルが教員資格試験を受けた折の博物学の試験官であり、ケルナーは当時医学生であったが、メンデルとは共に学んだ。ケルナーはその後植物学に転じたが、メンデルが1866年に論文を発表した時、この縁でその別刷りはケルナーに送られ、それは今日ウィーン大学に残っている。そこで、メンデルは物理学、化学、植物学を学び、それが遺伝法則発見につながったことは、私の著書 (1) でも特に力を入れて指摘したので、ご興味ある方は参照されればと思います。

これで私の「国際メンデルデー」参加報告は終えたいと思うが、今回参加された方々から次のような指摘があった。メンデル法則は世界へ広まっているが、今回集まった国々はいわゆる欧米諸国で、その中で日本は特異な存在であり、早くからメンデル法則を導入し、メンデルの事績を顕彰しようとしている姿勢は注目するに値するということがあった。また、メンデルブドウを通じてブルノと繋がっていることも大いに関心と呼んでいたもので、これらの事実を (公財) 日本メンデル協会関係者にもぜひお伝えしたい。

文献

1. 長田敏行: メンデルの軌跡を訪ねる旅, 裳華房 (2017)
2. 長田敏行, メンデルブドウは来日して100年! 日本メンデル協会通信 (2015)

廣川秀夫元会長逝く!

長 田 敏 行
(公財) 日本メンデル協会理事

当協会元会長廣川秀夫博士は、去る3月8日急逝された。その日、私は前掲稿に書いたように「国際メンデルデー」に参加していたので、この訃報

を最初に知ったのは3月9日滞在先のウィーンのホテルであった。

廣川博士は分子生物学を専門とし、在外経験が長く、上智大学にお勤めされ、当協会会長時は同大学名誉教授であった。当協会にとっては、いわばアナログ世代からデジタル世代への移行期に労を取られ、放っておけば財務的に危機的状況を招いたかもしれない事態の回避にご尽力いただいた。また、財団法人から公益財団法人への移行の準備期に下諏訪町との折衝にも関わっていただいたが、多くの下諏訪町との面談機会に私と同席であった。

更に、忘れがたいのは、ある時「小淵沢の先に農家を求めた」とおっしゃられたことであった。その場所はどこであろうと思ったところ、諏訪郡原村中新田という場所で、私の出生地に近く、よく知っている場所であった。このことは上記旧財団法人の登記地下諏訪町との折衝などに無縁ではなく、廣川氏が原村へ向かわれる機会を利用して、共に下諏訪町を訪問したこともある。また、その求められた家には水利権が伴っているということであったが、水利権とは何であるかについてもお話した。また、その水源地も知っていることから、私としてはもっと説明することがあったのにも思っていた。それで、帰国したらお目にかかろうと思っていたところで、突然の訃報に驚いた次第です。

ご冥福をお祈りします。



平成 30 年度 市民講座「メンデル講演会」の記録

本年度は、2018年11月24日（土）13:30－15:30に、長野県下諏訪町町民センターで石浦章一博士と長田敏行博士を演者として開催され、講演内容は別記の通りでした。石浦博士の年配の方であれば誰でも気になる記憶についての講演は、博士の軽妙な語り口もあって参加者に大いに関心をよびました。参加者は50名に達し、質問も出て、盛会でした。河野会長も挨拶されたが、聴衆の関心の所在を知るために、初めてアンケートを取りました。回収率も良好でしたので、得られたデータは次回のメンデル講演会に生かされると期待されます。なお、詳細は（公財）日本メンデル協会のウェブサイト参照下さい。

講演要旨

記憶力を鍛える

演者 石浦章一博士（東京大学名誉教授・同志社大学特別客員教授）

私たちは自分では気づかないペースでゆっくりと老化している。今回は「記憶力を鍛える」という話題でお話しますが、「なぜ覚えられないか、記憶には種類があるか、遺伝子はこれらにどう関係しているか、記憶力を増進させることはできるのか」などについてお話しします。特に、普段の運動、食事、サプリメント、薬のよし悪しについても触れたいと思います。

メンデル生誕 200 年に向けて

演者 長田敏行博士（東京大学名誉教授・法政大学名誉教授）

今春3月8日には「国際メンデルデー」がありましたが、その折話題になったのは2022年にはメンデル生誕200年を迎えるということで、これを世界的に祝おうという方向に向かっております。（公財）日本メンデル協会は、第2回の「メンデル特別展」を予定しておりますが、これを通じて、この世界的企画にも参画の予定です。改めてメンデル法則発見の現代的意義を考えてみたいと思います。

メンデル講演会の経緯

メンデル講演会をなぜ行っているかについては、時々お尋ねをいただくので、以下にその経緯を記します。財団法人日本メンデル協会は、篠遠喜人博士所縁の下諏訪町に事務局を置いて、長野県教育委員会を主務官庁として1985年に発足しました。それを契機に、1985年11月9日に、財団法人日本メンデル協会設立記念文化講演会が開かれ、協会から篠遠博士を始め複数の関係者が出席し、当時の副会長中沢信午博士（山形大学名誉教授）が「メンデルの遺跡を訪ねて」と題する講演をされました。その後、しばらく中断の時期もありましたが、復活して今日に至っております。公益財団法人日本メンデル協会となって事務局は東京へ移りましたが、重要な事業として行われており、今回で16回目となります。その後、町民大学の一環としても行われるようになったので、そちらは6回目です。なお、最近の講演会の概要は協会のウェブサイトで迎えますので、詳細はそちらを参照ください。

長田敏行

理事会 (任期2年)

会長	河野重行	東京大学名誉教授
副会長	日詰雅博	キトログニア編集長・愛媛大学名誉教授
理事	松永幸大	東京理科大学理工学部教授
理事	数藤由美子	放射線医学総合研究所計測・評価部チームリーダー
理事	川岸郁朗	法政大学生命科学部教授
理事	長田敏行	東京大学・法政大学名誉教授

監事	平野博之	東京大学大学院理学系研究科教授
監事	山口正視	千葉大学真菌医学研究センターグランドフェロー

評議員会 (任期4年)

評議員	草場 信	広島大学大学院理学研究科教授
評議員	酒井 敦	奈良女子大学大学院自然科学系教授
評議員	佐甲 (永田) 典子	日本女子大学理学部教授
評議員	佐野俊夫	法政大学生命科学部教授
評議員	田中一朗	横浜市立大学名誉教授
評議員	塚田為康	(一般財団法人) 和田薫幸会評議員
評議員	中村宗一	琉球大学名誉教授
評議員	中村俊夫	信州大学名誉教授
評議員	馳澤盛一郎	東京大学大学院新領域創成科学研究科教授
評議員	東山成江	名古屋大学大学院理学研究科准教授
評議員	宮村新一	筑波大学大学院生命環境科学科准教授
評議員	邑田 仁	東京大学名誉教授

編集後記

今年度の(公財)日本メンデル協会の「メンデル協会通信」をお届けいたしますが、今回は、当協会のもう一つ重要な刊行物であるキトログニア (CYTOLOGIA) についてもお知らせしたいと思います。キトログニアは2019年度に創刊より90年目を迎える、わが国で刊行された最初の遺伝学関係の欧文学術誌ですが、ただ長い歴史があればいいのではないということをお示したいと思います。

今年の8月には、Science誌にパンコムギのゲノムがついに決定されたという論文が載ったと思いますが、それはパンコムギのゲノムが極めて複雑で複三倍体であるが、そのような生物でもゲノムが決定できたということが話題でした。しかし、これまでの科学的蓄積が可能にしたもので、その第一はゲノム組成がAABBDDであることを木原均博士が決定したことです。その木原博士は、1929年キトログニア創刊号の巻頭論文を飾っております。更に、木原博士の直弟子である常脇恒一郎博士は、キトログニアの最新号にパンコムギ研究の初期に如何にして研究材料が入手され、どのようにこの分野が発展していったかの概観の論文を新資料に基づいて寄稿されております。キトログニアにも目をとめてくださればと思って認めました。

長田敏行 (本会理事)